

丸腰の防衛

「今回のことは、落としまえをつけときました。当座のことも何かあったら、すぐ言うてください。俺らで解決しますさかい」

「でも、野口さん。今度使った金は、死に金でっせ。これから同じことがあっても、絶対、俺らのようなもん頼んだらあきまへん。野口さんにとっては頼まない警察かも知れませんが、なんだかんだ言うても、最後は警察ですわ」

「連中も警察と面と向かって争う気いなんてありません。それに暴力団がこの世の中で一番怖いのは、やっぱり警察でっせ」と言って、私を見据えた。

われわれが警察の手を借りて暴力団を相手に闘った場合、その「お礼参り」がもつとも心配になることである。

その後、「その筋の人」の忠告にしたがって、疑心暗鬼を抱きながらも、警察に相談に向いた。警察の対応は実に丁重で紳士的であった。

「暴力団がお礼参りをするなら、あいては真っ先にわれわれ警察官を狙うでしょう。それならば、われわれにも女房、子供がありますから、暴力団の取り締まりなど出来ません。実際に、何度も暴力団の手入れをして来ましたが、警察官やその家族などがお礼参りを受けたことは一度もありません」

この言葉を聞いて、私は納得し、それまで抱いていた警察に対する半信半疑、五分五分の気持ちに決着がついた。

暴力団はもちろん「その筋の人」と繋がりを決して持つてはいけないという決意と、いかなる妥協もしないことを、このとき以来固めた。

解決を依頼した「その筋の人」には、それ以外にも暴力団の舞台裏や本音の話など、いろいろなることを教えられた。

ただ厄介なのは、こちらが彼等とは拘わらなくなっても、彼等の方からやって来るのである。